

教育社会心理学の展望

内 藤 哲 雄

(信州大学)

はじめに

部門別にまとめて1年間を展望する方法は1985年度に開始され、過去に5回試みられている。しかしながら、例えば子どもの教科学習1つを取り上げても、教授・学習部門だけでなく、学年差を考えれば発達部門と、個人の性格を考慮すれば人格部門と、他の子どもや教師との関係が含まれば社会部門というように、互いの部門間が関連を持っている。同様のことは、測定・評価、臨床、障害の各部門とについてもいえる。また、実際になされたそれぞれの学会発表の割当部門や部屋割は、発表者自身の研究者としてのアイデンティティや個人的関心、当該年度のテーマ別発表数の多寡（研究の進捗状況にも左右される）、さらには主催校側の会場準備や組合わせの都合などによって、恣意的に決定されている。従って、同じテーマでも、年度によって部門や部屋割のラベリングが違ったりすることになる。

上述のような背景から、ここ1年間だけを取り上げるのでは、過去を整理し将来を展望するという本来の主旨に沿って、問題項目別に動向をまとめたり、部門全体を展望することが困難であるといえよう。このため各執筆者とも、展望範囲の設定に苦慮しているようである。こうした点は、教育には教育者と被教育者が存在し、あらゆる教育現象に社会的側面が含まれることから、とりわけ社会部門で当てはまるといえよう。過去5年間の「社会部門」をみると、それぞれの著者が「社会」と「教育」の範囲の限定に、また具体的な項目の選定に苦慮した様子が窺える。

それでは、この私はどのようなアプローチを採ったらよいであろうか。魅力的なのは、天岩（1988）の教授・学習部門の展望である。学会発表については1点も取り上げずに、著者が興味を感じた論文だけを紹介し、今後の研究や実践のあり方について論じている。しかし今の私には、これほどの大胆さはない。

そこで本稿では、過去5年間に蓄積された社会部門の展望において、教育社会心理学の範囲がどのように設定されてきたか、将来の課題としてあげられたものは何かを、簡単に振り返ることからスタートしたい。ついで、ここ1年を限定された範囲内で検討し、研究法や将来の

課題について提言していきたい。

I これまでの研究について

1. 過去5年間の展望の展望

過去5年間の展望を展望するために、まず、それぞれの著者が設定した範囲と項目、および今後の課題としてあげたものを、以下にまとめてみよう。

長田(1986)：社会的行動に関する教育心理学的研究の動向と今後の課題

(展望の範囲と項目)

社会心理学の研究は、直接に教育との関連が明示されなくとも、ほとんどが基礎としてあるいは理論化に貢献するとの立場をとっている。

取り上げた項目は、1)対人認知、2)対人魅力、3)態度変容、4)集団構造、5)集団規範、6)リーダーシップ、7)攻撃と援助、8)進路決定と進学動機の8つである。

(今後の課題)

現象の背後にある原理を探り当て、それを理論化することでそれまで見えなかった現象を次々に発見していく、というアプローチがみられない。理論構築への熱意が著しく欠如している。

外来の理論の援用に際しても、鵜呑みにして追試するのではなく、わが国の社会現象の解明のために駆使するという姿勢が必要である。

現実の教育事象や社会事象との厳しい対決と理論構築へのたゆまぬ努力によって、やがてこの領域の研究が教育実践と不離一体のものとなることを信じたい。

竹下(1987)：社会部門

(展望の範囲と項目)

教育、特にプロトタイプとしての学校を念頭において、項目を選定してある。

項目は、学校教育[1]学校環境を含む全体、学級社会[2]教師による指導の生徒への影響、3)教師の生徒に対する認知理解、4)教師期待、5)生徒の対教師認知、6)学級の生徒同士の関係]、社会的行動の教育[7]平和教育、8)道徳教育、9)向社会的行動、10)原因帰属]の10である。

(今後の課題)

教師に関しては、生徒との関係以外の研究がみられず、社会心理学的研究が少ない。

教員養成大学の大学院設置の増加のためか、研究者と実践者との共同研究が多くなっている。しかし、教育実践に関する研究情報が組織化されていない。研究が散発的で、研究間の関連が乏しい。類似の先行研究の知見の有効利用、研究者相互の連絡の緊密化と共同計画の組織化の推進が必要である。

研究結果の解釈については、因果関係において思い込みが多い。また、研究の目標が発表そのものに終わることなく、教育現場に還元されるよう計画することが望まれる。

白樫(1988)：社会部門

(展望の範囲と項目)

展望の範囲は、広義の教育の社会心理学の分野に該当すると思われるもの、とされている。

項目は、1)総論・研究方法・辞典、2)孤独感、3)内発的動機づけ、親和行動、及び自己・他者認知、4)パーソナリティ、社会的動機、及び態度、5)態度変容、7)対人感情、8)向社会的行動、9)対話、ゲーム、及び公正理論、10)社会的影響過程、11)労働、役割、及び性、12)同調あるいはパフォーマンスに及ぼす社会的諸要因の効果、13)小集団システムとリーダーシップ、14)葛藤処理と環境、の14である。

(今後の課題)

多くの研究成果が発表されていながら、それら相互のデータ蓄積からまとまった理論へ発展していくという方向が、それほど明確には見えてこない。関連する分野でのわが国の研究者相互の交流が、まだまだ不十分である。

研究手続の厳密さ、データ処理の技術向上などは、今後ますます進むであろうが、考察すべき条件が多すぎると、現実の教育あるいは対人場面における人間行動理解への貢献にブレーキをかける恐れがある。

相川(1989)：学校教育の社会心理学：その発展の兆しと今後の課題

(展望の範囲と項目)

竹下(1987)に倣い、教育の原型ともいふべき「学校」を念頭におき、重要論文を取り上げている。ただし、竹下と異なり、学校の構成員である子どもと教師を中心に項目が設定されている。そこで、純粹の社会心理学的研究や被験者が短大生以上の研究は取り上げられていない。

項目は、子どもの実態に関する研究 [1)子どもの遊びについて、2)進路についての意識、3)子どもの自己認知]、子ども同士の関係に関する研究[4)友人関係、5)「いじめ」に関する研究]、教師に関する研究 [6)教師の資質、7)教師の認知様式]、8)教師集団に関する研究(た

し、該当する研究なし)、子どもと教師の相互作用に関する研究 [9)教師行動、10)教師行動に対する子どもの反応、11)相互作用の過程]、12)学級に関する研究、13)学校に関する研究 (校則、環境など)、14)地域社会に関する研究 (学校を取り囲んでいるものとして)、の14である。

(今後の課題)

まず、相川は、学校に係わる社会心理学的研究は増加してきており、社会心理学での知見や理論を用いて、教育問題を分析したり、教育の領域に適用しようとするものが多いと判断している。また、大量の現役教師が、兵庫教育大学、上越教育大学、鳴門教育大学を中心とした大学院に入学し研究するようになったことで、教育現場を知る研究者が増加しており、旧来の教育心理学の活性化と発展の兆しが窺えるとしている。

そして、今後の発展のための課題として、次の2点をあげている。第1の点は、因果関係について誤った解釈、あるいは強引な解釈が目につくことである。第2点は、現象に及ぼす要因の分析は盛んに行われるが、研究がそこで終わってしまう場合が多いことである。特に後者については、実験操作を導入しにくいので、訓練や治療的発想の研究が必要ではないかと提言している。

蘭(1990a)：教育社会心理学

(展望の範囲と項目)

竹下(1987)、相川(1989)に従い、教育の原型というべき「学校」を念頭においている。ただし項目の選定は、学校の構成員である教師と子どもを中心としている。また、教育の質は教師の質といわれるとして、教師に関する研究に重点を置いている。

具体的な項目は、教師研究 [1)教師の実践的指導力を支える教師と生徒の人間関係の研究課題、2)教師の自己概念と職能発達、3)教師による子どものパーソナリティ認知、4)教師の教科・生活指導とリーダーシップ、5)教師ストレス]、子ども研究[6)子どもの生活、7)子どもの自己・自己概念、8)子どものルール、9)子どもの社会的スキル、10)子どもの対人関係、11)子どものストレス]、教師と子どもの相互作用研究[12)子どもによる教師態度の認知、13)教師期待、14)教師のフィードバック]、の14である。

(今後の課題)

教師の社会心理学的研究が少ない。また、教育を教師と子どもの相互作用過程として捉えるのであれば、子どもの立場からの教師研究も必要であるとの指摘がなされている。

ついで、基礎的研究は多いが、実践的研究の少ないことがあげられている。

以上の5年間に蓄積された展望を検討すると、範囲と項目では、ほぼ2つのタイプに分割できる。長田と白樫の枠組みは、教育そのものよりも、社会心理学の方に重点を置いている。すなわち、対人認知、態度、集団のような、社会心理学のテキストで取り上げられる項目の視点から、教育心理学の展望を試みている。これに対し、竹下、相川、蘭は、教師、生徒、教師・子ども関係のような学校教育の枠組みから、社会心理学的に展望している。

後者の方が、取り上げる研究を学校教育の観点から絞り込んでいることから、より教育の問題に迫っているとの印象を与える。現場の教師にとっても、理解しやすいといえよう。しかし、実際の個々の記述をみると、どちらから接近するかの違いが目立つだけで、大差がないようである。また具体的な項目内容は、著者の関心によって多少の変動があるものの、教師、子ども、教師と子ども関係、子どもの集団については、毎年取り上げられている。

つぎに今後の課題としてあげられているものをみると、かなりの共通性が窺える。それらは、以下の4点に集約されよう。

(1)多くの研究がなされているけれども、散発的で、研究間の関連が乏しく、情報および研究者が組織化されていない。またこれと連動するが、(2)データの蓄積から理論化へというアプローチや方向性がみられず、その熱意も著しく欠如している。さらに、(3)研究の現場への応用が少なく、実践的研究が少ない。現実の教育事象や社会事象との厳しい対決と、理論構築へのためめぬ努力が望まれる。また、(4)研究を支える基本的な技術についての知識を欠くものが多い。(ただし、現実の教育や人間行動の理解のためにという視点を看過し、必要以上に技術に拘るのは、問題である)

2. この1年間の展望と過去6年間の総括

年報編集委員会により指定されたここ1年の展望範囲は、日本教育心理学会の総会のみ当該年度のもの(1990年10月、第32回)とされているが、他の発表等は1989年7月から1990年6月末までとされている。この間日本心理学会の大会については、1990年度の開催が6月で例年よりも早かったため、2回開催されている。この他に、心理学研究、教育心理学研究、実験社会心理学研究、社会心理学研究等での発表まで含めると、社会心理学分野の研究論文数は膨大なものとなる。教育心理学の観点から絞り込むにしても、かなりの数である。しかし、これだけの研究を取り上げたとしても、既述のように、ここ1年間だけによって研究の動向をつかみ、将来を展望することは困難である。また、よほどのエポックメイキ

ングな研究が展開されない限り、たった1年で多くの研究者の視点や研究動向が大きく変化することはないであろう。もちろん、誰かがどこかで鼓舞すべき有意義な新機軸を展開し始めた兆候を、見逃す危険性がないとはいえないが。さらに、全ての研究を取り上げまとめるという意味での展望を行うには、私の能力からして時間的に厳しい。

そこで編集部と読者諸氏のご寛恕を希い、次のように居直ることにします。まず、ここ1年間の教育社会部門の研究の実態や傾向を概観するための資料としては、原則として、教育心理学会総会で発表されたものに限定する。学会誌と紀要の論文は学会発表後に纏められるものが多いし、教育心理学に直接関係する研究発表の大半は教育心理学会の総会でなされるとみなすことができるからである。さらに、過去の5年間の展望との関連づけを主目的とし、個々の論文についての具体的な目的や方法、結果や解釈についてはほとんど触れないで、全体的傾向について言及することとする。

教心第32回総会での「社会部門」における発表は、53件である。このうち社会8の「言語・メディア」の6件については、内容からして教授・学習の分野の方が適切と考えられる。この他教育との直接的関連があまりないと考えられるものを除き、逆に他部門の発表で社会部門に属するとみなせるものを加えたところ、61件であった。これらをKJ法により分類したところ、12項目に纏まった。そこで以下では項目ごとに概観しよう(ここで引用し発表年度の省略されたものは、すべて日本教育心理学会第32回総会の発表論文集による)。

(1) 教師適性と成長

安西は、保育者養成校学生を対象として、保育者としての各資質の必要度、現職者の保有性の推定、自身の評定を回答させている。また西山は、教職志望学生の教職観と小・中学校における学校生活や教師との体験及び交友体験との関係を検討している。しかしながら、安西と西山の研究では、いずれも教育者観についての検討が中心で、学生自身による評定を教育ニーズの資料として活用するまでに踏み込んだ視点がみられない。学生全体への指導上の配慮とか、個別指導のための検査としての利用について言及されていないのが惜しまれるといえよう。これに対し大庭は、当初から教師養成への活用を目的とした適性検査バッテリーとして、YG性格検査とエゴグラム・チェックリストを用いて、採用試験合格者と一般学生の比較をしている。

原岡の研究では、現職教師の自己成長が役割意識と関係する点を明らかにしている。また竹下は、教師が日常出会うことの多い葛藤場面での対処能力を、小グループ

による話し合いを通して学習するために作成された事例教材について検討している。これらは、現職教師の自己研鑽や研修による資質向上のための基礎的研究として重要であるといえよう。

以上の研究から示唆されるのは、教師にとって必要な資質とは何か、不足するものは何かについての全体的な見通しをもつことの必要性であろう。そのためにも、現職だけでなく教職志望者をも含めた階層教育や教育専門職としての段階別教育目標の体系化が望まれよう。というのは、1年目も10年目も全く同じように子ども達を教育すればよいというのでは、能力的な深化がみられないし、研修の意味がないからである。この種の問題は、同一資格で業務に従事している医師や看護職でも指摘され始めている。しかし、単に資格を階層化するだけで解決できるとは思われない。資格以前に、これくらいの経験年数を積んだものは、このような能力や資質が要求されるという基準（目標）を作成していくことが望まれる。これによって段階別の研修が可能となるし、自己啓発の目標が明示されることになるからである。産業界で用いられるOJTとoff-JTやCDPの観点から研修内容を吟味するのも有効であろう。今後こうした視点から、個々の研究が進められることを期待したい。

(2) 教師側の認知・行動

子どもに対する認知を扱ったものには、蘭の、教職経験年数の違いによるパーソナリティ認知の差異を検討したもの、嶋野・勝倉の、教師の受容・要求の指導態度（学級の児童による評定）と子どもの行動を問題として認知する程度の関係を検討したものがある。この2つの研究は認知の差異を生じる要因を明らかにするものであるが、さらに何故そうした現象が生じるのかについての説明が欲しいところである。というのは、蘭(1990c)が博士論文を纏めた『パーソン・ポジティヴィティの社会心理学』の中で取り上げているように、教師の児童に対するポジティヴィティは学級の多くの児童の学業成績向上にも影響するからである。

さて、現場での生徒指導におけるさまざまな問題や工夫に関しては、小・中・高の現職教師を調査対象として自由既述させて質的に分析した、西山・今西・藤川による発表がある。西山らの研究については、収集された現場教師の工夫や、それに対する研究者のコメントを纏めたものが、公開されることを期待したい。

ところで、教師の授業中の個々の行動を分析したものとしては、藤本・浜名・吉田の視覚的非言語行動に関するものがある。また、言語行動については、児童に対する認知や感情によって、児童の回答へのフィードバックがどのように異なるか検討した村中・浜名・吉田の研究

がある。これらの教師行動に関しては、個々の行動の背後に想定されるカテゴリーや子どもに及ぼす効果について教師に知識を与え、訓練した場合にどのように変化するかについて、実験的に検討する課題が残されているといえよう。

(3) 教師に対する子どもの認知

佐藤・松元は、小・中・高の子どもを対象として、教師への信頼観の概念とその形成要因を検討している。また藤村・勝倉は、教師の態度について受容的と認知する程度と、学級適応及び教師の児童観との関係を調査している。今後の研究として、前者については信頼の効果についての分析、後者については受容的と認知されやすい具体的な行動の分析まで、互いに拡張されることが期待される。

西山・今西・藤川は生徒指導について（ただし回想法）、久保・浜名・吉田は部活動の指導について、教師行動に対する子どもの認知をかなりの規模で取り上げている。しかし、これら2つの研究が静態的なのに対し、富田の1クラスのみの事例的研究は、動態的な1年間にわたる教師態度認知に関する追跡的研究であり、方法論的には緻密さを欠くが大胆で興味深い。とくに、A（教師態度を好意的に認知しており、教師も「いい関係にある」と認知した児童）、B（教師関係を非好意的に認知しており、教師も「いい関係ではない」とした児童）、C（教師態度を非好意的に認知していたが、教師は「いい関係にある」とした児童）の3名を抽出し、彼らを注目児として7月の結果と心掛けるべき態度目録を教師に渡し、機会あるごとに教師に確認して児童の認知変化を分析した点は、臨床・教育社会心理学的ともいべき新鮮なアプローチである。

児童の行動に対する教師の言語的反応が、児童にどのように認知されるかについては、2つの研究がある。伊藤・浜名・吉田は、児童の無答への教師の反応によって、どの程度教師から期待されていると判断されるかについて明らかにしている。他方の竹内・三宮・遠藤の研究では、教師に対する児童の好悪感情が叱りことばの認知に及ぼす効果を検討している。また井上は、大学生を対象として、教師の教授活動、人柄評価、学生のテストの成績と座席の位置との関係を調べている。しかし、教師への席の近さと相関するのは、テスト成績のみであった。

(4) 子どもの学級集団行動

川上・内藤は、代表委員・班長・お楽しみ会リーダーなどの代表の経験や活動内容が児童の代表意欲に及ぼす効果、代表意欲と学級会活動への参加性について調査・分析している。ついでこれに基づいて代表の指導上の注意を考察している。また多良・内藤は、逆に周辺児・孤

立児の集団行動について、とくに向社会的行動との関連で調査・分析している。これら2つの研究は、いずれも横断的・静態的研究である。これに対し、吉田の研究は、縦断的・動態的と呼べるものである。1クラスのみであるが小学校5年生進級時から卒業までの2年間にわたって、各学期の最初にグループ編成を(合計6回)実施し、友人関係がどのように変化するかを分析している。既述の富田の研究と同じく、臨床・教育社会心理学的アプローチに属するといえよう。

ところで、集団行動が個人に及ぼす効果を取り上げたものとしては、学業不振児に及ぼす小集団学習の肯定的影響を検討した永田の実践的研究と、集団討議場面に対して肯定的か否かが原因帰属に及ぼす効果を実験的に吟味した向井・深谷の研究が注目される。

(5) 思いやり(共感性)と愛他行動

思いやりの尺度を構成したものとしては、出口と内藤・佐々木の2つがあり、手法に関しては両者とも因子分析によっている。また愛他的行動の尺度と人格諸特性尺度の関連を検討したものに、丸山・清水の発表がある。今後これらの尺度を用いた診断的評価と、思いやり向上のための教育実践が求められよう。

幾分めづらしい研究としては、大学受験での浪人経験の有無が寮生活の予備校生への共感に及ぼす影響を検討した橋本の研究がある。

(6) いじめ

いじめについては、長田(1986)、竹下(1987)、相川(1989)らの展望でかなりのスペースが割かれているが、今回の社会部門での発表は1件もなかった。他部門をみると、人格部門で1件、発達部門で1件であった。

小島は、「いじめられ」体験と少年鑑別所に収容された少年の非行との関連を、事例分析的にタイプ分けし考察している。「いじめ」ではなく、「いじめられ」が非行につながるものの可能性を取り上げた点が注目される。

発達部門での発表であるが、臨床と呼んだ方がふさわしいような「いじめ」に関する研究として、松村による学級担任の対応を検討した事例研究がある。この事例は、教師が学級集団や家族に対してどのように働きかけるべきであるか、実践的に検討することが不可欠であることを示唆する。

(7) 学校観・校則・学級規範

学校観、校則と学級規範は、子どもの集団行動を規制したり、促進するだけでなく、教師観や学習観にも影響し、学業成績や性格形成をも左右するといえよう。

学校文化・学校観を中心に検討したものには、浅田と那須の2つがある。校則遵守の程度と学業成績の関係を検討したものには、杉村・伊谷の調査がある。また学級

規範の構造に影響する要因を取り上げたものに、福田・内藤の研究がある。しかしながら、学校・学年・学級の置かれた状況や子ども達の特性から、経営の診断にあたり、目標を設定し、その効果を検討するといった実践的研究は、見あたらなかった。

(8) 学校の物理的環境

校舎については、木造と鉄筋に対する認知の違いを比較した高橋による発表がある。講義教室については、吉川によるものがある。また移転にともなう環境変化が児童の行動変容に及ぼす影響を検討したものとして、西田・福富・村上の研究がある。

学校の物理的環境は、子どもの学習、学級内集団行動、学級間集団行動、学年間集団行動に多大の影響を及ぼすと考えられる。今後の研究が必要であろう。

(9) 進路についての意識と指導

進学指導に絞ったものとしては、山崎によるものと洲上によるものがある。また進学と就職の両者を含むのは、女子高校生を対象とした、古澤・山下の進路志望動機分析がある。

職業観や職業目標に関する研究は、堀田・渡辺、渡辺・堀田、松本・渡辺、若松、松本卓三、松本真作の6発表がみられた。

進路については、進学も就職も、実際に進んでみなければわからない部分が多いし、指導する教師自身が知識を持たない場合が多い。また、興味や能力も開発される要素がある。どのようにガイダンスすべきかに関する研究も必要であろう。

(10) 一般的意識・態度

中学生を対象としたものは、吉田・丸山・森本による生きがいについての調査がある。高校生では、進学校と非進学校の意識と行動の違いを比較検討した、古澤の興味深い調査がある。

大学生を対象としたものは、調査が容易なことにもよるのであろうが、比較的多くみられた。一般的な意識調査としては、石川・池田・平石・佐藤と、曾我・吉田によるもの等がある。また学生本人ではなく、大学教職員がどのようにみているか調べたのに、西出・池田・吉井・緒賀らによるものがある。特定のテーマに関するものは、宗教的態度・意識についての丸山と石黒・酒井・宮本の2発表がある。

これらの調査結果が、具体的な指導目標や方法につながることを期待したい。

(11) 性の意識・態度・行動

性に関する発表も比較的多かった。役割についての一般的調査は、末田と園田・青木の発表がある。特定の内容に絞ったものには、小田の否定的場面についてのもの、

柴田・野辺地の身体的部位に関する認知についてのものがある。

性行動に関しては、内山が性非行少女についての、松谷が女子大生の避妊群と非避妊群を比較したものについての調査を実施している。

ところで、上述の各発表はいわば実態調査的であるが、教育的にはより積極的に意識・態度・行動を変容することが望まれよう。これに該当するものとして、性役割の判断基準そのものを変容させようとした柘田の研究があげられる。

(12) 通信教育

生涯教育としても活用されている通信教育を取り上げたものに、山崎・外島・田中・大村と外島・山崎・田中・大村の実態及び受講意識についての調査がある。

〈この1年間の要約と過去6年間の総括〉

この1年を検討する際にまず感じたのは、被調査者数が多いとか、緻密な実験計画に基づく研究が増加したことである。さらに、社会部門として割り当てられたものは少なかったが、他部門で該当するものを合わせるとかなりの数の研究がみられたことである。

また、注目されるべきものとしては、単一の学級を取り上げ事例的に分析した研究がみられたことである。というのは、あらゆる教育社会心理学の研究は、最終的に個別学級の実践と結びつかねばならないからである。Korchin, S.J. (1976) は、臨床心理学的観点から、心理現象を(1)一般心理学、(2)差異心理学(個人差、精神測定)、(3)個別人格の心理学(臨床的)に分類している。学級がそれぞれに特有の特性・目標・問題を持つとするならば、まさに個別学級的(臨床的)心理学の視点と研究が不可欠となるであろう。そのための基礎理論と、(経営)診断的評価、改善目標と改善方法の立案、実施と効果の評価に関する応用的理論の構築や技法の開発も必要となろう。すでに現職教員を中心としたさまざまな実践的工夫が公開されているが(例えば、『学級経営読本』教育開発研究所, 1984)、科学的研究としては十分とはいえない。筆者は、心理臨床での『ケース研究』シリーズが心理臨床家の全体レベルを著しく向上させたように、学級臨床での『ケース研究』の蓄積が学級経営者(担任)の全体レベル向上に有効ではないかと考えている。いうまでもないが、学年経営者(学年主任)や学校経営者(教頭・校長)には、スーパーバイザーとして指導・助言する能力が必要である。

次にあげられる問題は、これまでの一連の社会部門の展望とも共通するものである。竹下(1987)、相川(1989)、蘭(1990a)らは、教育社会心理学の展望範囲を学校教育心理学に絞り込んでいるが、それでよいのだろうか。例

えば、日本教育心理学会第32回総会のシンポジウムにおいては、「中年の発達心理学」が取り上げられている(河合・森田・藤原・三川, 1990)。特別講演では、「老いと死の臨床」も取り上げられている(日野原, 1990)。また、教員養成学部が多くで、採用側の事情があるとはいえ、学校の教員とならないコースが設けられるように変化している。こうした状況は、教育心理学会全体としての、また教育社会心理学分野での、取り組む範囲の拡張や概念の変容をもたらすように思われる。つまり、誕生から死に至るまでの教育問題を対象とするような、変化の動向が感じられる。このような方向づけが必至とするならば、今後は社会人(外国からの留学生も)を対象とした学校教育、家庭内教育、企業内教育、生涯教育のテーマ等が、本格的に取り上げられなければならないといえよう。

さて、ここでいよいよ過去5年間の展望で集約された既述の4つの課題について検討してみよう。なお、5年間の振り返りということであるが、原岡(1990a)の『心理学研究の方法と問題』によれば(第1・2章で「教育・社会心理学……」と銘打たれているように、実際には、教育社会心理学を中心に考察されている)、過去40年近く同様な傾向がみられたようである。

まず、第4の基本的な研究技術についての知識に関しては、着々と改善されつつあるといえよう。その他に関しては、好意的にみれば早急に改善するのが困難であるという理由も含めて、これまでの問題が取り除かれてはいない。すなわち、多くの研究がなされているけれども、散発的で、研究間の関連が乏しく、情報及び研究者が組織化されていない。また、データの蓄積から理論化へというアプローチや方向性がみられず、その熱意も著しく欠如している。さらに、研究の現場への応用が少なく、実践的研究が少ない。現実の教育事象や社会事象との厳しい対決と、理論構築へのためめね努力が望まれる。

II 今後の研究に関する提言

1. 情報の意味と教育社会心理学の視点について

田村(1981)は、『流通産業生き残りの条件-18-』において、鍵を握るのは解釈システムであるとして、信号情報から価値を創造すべきことを説いている。まず彼は、日本語の情報は、英語でのインフォメーション(信号情報)とインテリジェンス(解釈)にあたる2つの要素から成り立つとしている。そして、戦略的情報システムによって集められる情報の多くは、信号情報であるとする。個々の信号情報は断片的であり、部分的であり、定性的である。それらは環境変化の先行的な兆候を示す未来からの信号であるといっても、それらが将来の変化をどの程度

指標しているかの信頼性はかならずしも高くない。かくして、戦略的情報システムが成功するかどうかは、これらの信号情報を人間がうまく解釈できるかどうかにか大きく依存することになるというのである。

また、優れた解釈システムの構造的基礎として彼があげるの、第1に多数の信号情報が一か所に集中され、蓄積されて、信号情報の種々の混ぜ合わせ、組合わせが行われることである。第2は、比較のベースをつくることによって、多くの信号情報に共通してみられるパターン認識が行われることである。第3は、新しいパターンがみられると、それを言語によって表現するという概念形成が盛んなことである。

第1の特質は、個別的・断片的な情報を結合することによって、より高度で意味ある情報が発生するという原理の応用である。昔、中国に商という小さな属国があった。その経済基盤は主国に依存していたが、商の国の人にはモビリティが高く、多くの国を旅行し、同じ物品がある地域では高く、別の地域では安いことを知っていた。主国が減びたとき、商の国は経済の基盤を失いかけたが、安い地域で物品を仕入れ高い地域で売ることによって立て直したという。これは遠隔地商業であるが、商の国の人からはじめて行ったので、以後この種の業を商業といい、それに従事する人を商人と呼ぶようになったという。ある地域で価格が安い、別の地域では高いというそれぞれの個別情報は、それ自体では価値がないが、これらを組み合わせるとき、商業という新しい業を発生させる情報となったのである。

第2の、比較のベースをつくることによる信号情報のパターン認識の例としては、次のようなものがあげられている。ファッションビジネスでは、ファッション情報プールの定時点観測がよく行われる。原宿の街頭を歩いている人々の写真を異時点でき取り、それを比較することで異時点でのシルエット、色、柄などの変化パターンを解釈しようとする。こうした解釈法は、心理学でも最もよく用いられているといえよう。

第3点については、次のような特質を持つ。多くの信号情報に現われる新しいパターンは、それを表現する言葉、つまり概念形成によって要約され、解釈される。田村によれば、概念はミニミニ・コンピューターである。例えば、クリスタル族という概念によって、1980年当時の若者の志向にかかわるいかに多くの信号情報が要約され、その解釈が容易となったかが指摘されている。そして、概念形成をうまく行うには、時代の潮流を読みとる新聞記者の嗅覚と、それを美的に表現する広告クリエイティブライターセンスが必要であるというのである。

教育社会心理学の研究者で、信号情報の単なる提示で

はなく、価値創造的研究をしているといえる者がどれほどいるであろうか。さらに田村は、信号情報に気づき、これを読み切るためには、物狂おしいばかりに対象に関心を示すことが必要であるという。対象への飽くことのない興味は、佐伯(1987)の『教育心理学をおもしろくするには』の核心でもあろう。

2. 臨床的個別学級社会心理学の提唱

教師はたとえ特定の子どもの問題に対処する場合であっても、学級の他の子どもたちへの働き掛けを考慮しなければならないことが多い。こうしたケースは、本稿でも取り上げた学級内の「いじめ」などでは自明であろう。ところが、非社会的問題行動に分類される登校拒否のようなケースでも、内藤(1988)が例示しているように、登校拒否児の不規則な授業参加への理解を求め、学級全体の受入態勢をつくるためには、他の子どもたちへの働きかけが必要である。こうした配慮は、学業不振などの別の問題についても同様に望まれるであろう。つまり、特定の児童・生徒のさまざまな問題に対して、学級全体としてどのように対処するかといった、学級経営的視点やアプローチが教師に要請されているといえよう。

学級経営に関連する基礎的研究は、小川編著(1979)の『学級経営の心理学』に代表されるように、すでにかかなりの成果をあげている。しかしながら、多くの要因が介在し、いわば独自の「顔」をもつ個別の学級に適用するには、まだまだ不十分であるといえよう。相川(1989)は、基礎研究による知見の応用研究に際しては実験的方法の使用が困難であり、訓練や治療の発想が必要なことを指摘している。そこで、個別的で特有な存在である学級に対して、臨床心理学的手法を適用してはどうかということになろう。しかし、上述の著書の「まえがき」で小川が指摘しているように、個人を対象とする臨床専門家と学級経営にあたる教師とでは、立場や視点に大きな違いがあるといえよう。

上述のように論考するならば、個人対象の臨床心理学とは異なった、独自の学級経営臨床の心理学の領域設定と理論化・体系化が必要となるように思われる。これをどのように進めるかについては、すでに本稿のこの1年間の要約と過去6年間の総括のなかで言及してきた。そこでここでは、多数の要因が介在し、要因の特定化や実験的統制が不可能ともいえる臨床的アプローチにおいて有効と思われる、斎藤(1976)の「かのように」の方法論について簡単に触れることで、本稿を締めくくりたい。

斎藤は、「もしも動物の行動が下等な心的能力によって解釈されるならば、より高等な心的能力の所産と解してはならない」とのモルガンの公準に関連して、問題の所在と新たな方法論を提起している。すなわち、この公準

は、生物学において下等な動物の行動を擬人的に解釈する誤りを防止するには有効であったが、人間における高等な心的能力の所産を、動物研究によって見いだされた下等な心的能力を並行移動することによってしか解釈しないという逆の誤りがみられるようになり、それが現在でも盛んに横行しているように思われる、というのである。つまり、モルガンの公準は、いわば上から下への動きに対するブレーキというだけのものであって、下から上への動きを促進するものではなかったが、現実には葉がきき過ぎて逆作用をもたらしたというのである。ついで、断定的で最終的な解釈を意味する「のである」とは異なり、作業仮説として研究を促進する役割を持つ「かのように見える」という解釈方法を、積極的に採用すべきことを主張している。

上述の斎藤の見解から示唆されるのは、基礎研究のアプローチで解明された知見や理論の枠組みのみで、個別学級臨床の研究を進めるべきでないという点であろう。個別学級そのものを対象とした、「かのように見える」という大胆な作業仮説を設定することが望まれよう。

引用文献

- 相川 充 1989 学校教育の社会心理学：その発展の兆しと今後の課題：社会部門 教育心理学年報, 28, 92-103.
- 天岩静子 1988 認知心理学的研究の発展をめざして：教授・学習部門 教育心理学年報, 27, 85-89.
- 安西豪行 1990 保育者養成校学生の保育者観に関する研究 教心第32回総会論文集, 314.
- 蘭 千壽 1990a 教育社会心理学：社会部門 教育心理学年報, 29, 72-81.
- 蘭 千壽 1990b 現職教師による児童のパーソナリティ認知 教心第32回総会論文集, 308.
- 蘭 千壽 1990c パーソン・ポジティヴィティの社会心理学：新しい人間関係のあり方を求めて 北大路書房
- 浅田 匡 1990 学校文化と自己教育性(1)：高校生を対象に 教心第32回総会論文集, 260.
- 出口保行 1990 思いやり(共感性)の因子分析的検討 教心第32回総会論文集, 282.
- 藤本明彦・浜名外喜男・吉田寿夫 1990 児童に対する教師の視覚的非言語行動に関する研究 教心第32回総会論文集, 294.
- 藤村 哲・勝倉孝治 1990 児童の認知する教師の受容的態度に関して 教心第32回総会論文集, 305.
- 福田勝則・内藤勇次 1990 児童期における学級規範に関する研究(Ⅰ) 教心第32回総会論文集, 329.
- 洲上克義 1990 進路指導の社会心理学的研究：高等学
- 校での教師-生徒の相互作用と時間的展望の関係 教心第32回総会論文集, 285.
- 原岡一馬 1990a 心理学研究の方法と問題 ナカニシヤ出版
- 原岡一馬 1990b 教師の自己成長に関する研究Ⅱ 教心第32回総会論文集, 312.
- 橋本 巖 1990 他者の社会的「境遇」に伴う感情の理解：同一「境遇」の経験と推測の適切さ評価の関係 教心第32回総会論文集, 283.
- 日野原重明 1990 老いと死の臨床(研究委員会企画特別講演) 教心第32回総会論文集, S2-3.
- 堀田千秋・渡辺三枝子 青年期における職業目標の有無とその実現：「青年の職業適応に関する国際比較調査」の分析(その1) 教心第32回総会論文集, 286.
- 井上正明 講義における学生の座席選択行動に関する研究(Ⅰ)：教師と学生の対人間距離と教授活動及び人柄評価との関係 教心第32回総会論文集, 303.
- 石黒彰二・酒井亮爾・宮本真理 1990 大学生の宗教意識と家の宗教との関係 教心第32回総会論文集, 142.
- 石川雅健・池田博和・平石賢二・佐藤明美 1990 大学生の現代的心性に関する調査研究(Ⅰ)：大学生の意識調査より 教心第32回総会論文集, 228.
- 伊藤晴朗・浜名外喜男・吉田寿夫 1990 児童の無答に対する教師の言語的フィードバックに関する研究 教心第32回総会論文集, 295.
- 川上 保・内藤勇次 1990 小学校における代表意欲に関する研究 教心第32回総会論文集, 330.
- 河合隼雄・森田 孝・藤原勝紀・三川俊樹 1990 中年の発達心理学(準備委員会公開シンポジウムⅠ) 教心第32回総会論文集, S11-13.
- 吉川政夫 1990 大学の講義教室環境評価の試み 教心第32回総会論文集, 300.
- 小島賢一 1990 非行少年に見られる「いじめ」についてⅣ 教心第32回総会論文集, 277.
- コーチン S.J. 村瀬孝雄(監訳) 1980 現代臨床心理学：クリニックとコミュニティにおける介入の原理 弘文堂 (Korchin, S.J. 1976 *Modern Clinical Psychology : Principles of intervention in the clinic and community.*)
- 古澤照幸・山下利之 1990 女子高校生の進路志望動機分析(1) 教心第32回総会論文集, 267.
- 久保博義・浜名外喜男・吉田寿夫 1990 部活動における教師行動に関する研究 教心第32回総会論文集, 297.
- 教育開発研究所(編) 1984 学級経営読本：学級経営の具体的課題を小・中・高別に整理 教職研修(臨時増刊

- 号), 9.
- 丸山純一・清水 裕 1990 愛他的行動と人格諸特性との関連について 教心第32回総会論文集, 216.
- 丸山久美子 1990 現代青年の社会不安意識と宗教的態度 教心第32回総会論文集, 280.
- 栢田弘子 1990 性役割に関わる判断並びに判断基準の変容のための援助の試み(1) 教心第32回総会論文集, 318.
- 松本純平・渡辺三枝子 1990 就職を希望する女性の職業に対する態度について(1) 教心第32回総会論文集, 288.
- 松本真作 1990 職業ガイダンスシステムの開発(2): システムの特徴と利用状況 教心第32回総会論文集, 291.
- 松本卓三 1990 進路選択行動に関する研究(2): 認知度の高い職業に対する就職希望に関して 教心第32回総会論文集, 290.
- 松村茂治 1990 ある学級担任の教師による「いじめ」への対応 教心第32回総会論文集, 147.
- 松谷徳八 1990 避妊群と非避妊群による女子大学生の性意識と態度の差異に関する研究 教心第32回総会論文集, 171.
- 向井敦子・深谷澄男 1990 集団討議場面に対する態度と原因帰属(II): 課題遂行行動のみたと遂行した行動への自己評定を手がかりにして 教心第32回総会論文集, 332.
- 村中明彦・浜名外喜男・吉田寿夫 1990 児童の回答に対する教師のフィードバックに関する研究: 児童に対する認知および感情による処遇差 教心第32回総会論文集, 296.
- 永田彰寿 1990 学業不振児に及ぼす小集団学習の影響: 学習性無力感, 学業不振感, 原因帰属様式の変化からの検討 教心第32回総会論文集, 433.
- 内藤哲雄 1988 ベテラン教師の苦悩 内藤哲雄・島崎保(編著) 人と人のかかわりとしての教育心理学 福村出版, 145.
- 内藤勇次・佐々木修正 1990 質問紙法による児童生徒の思いやり測定に関する研究 教心第32回総会論文集, 145.
- 那須光章 1990 中学生・高校生の学校観・学習観に関する調査研究 教心第32回総会論文集, 262.
- 西田智男・福富 護・村上美奈子 1990 学校の移転に伴う児童の行動変容IV: 総合的考察 教心第32回総会論文集, 298.
- 西出隆紀・池田博和・吉井健治・緒賀 聰 1990 大学生の現代心性に関する調査研究(II): 大学教職員からみた大学生の心性 教心第32回総会論文集, 229.
- 西山左代子 価値志向性における成育体験の影響(2): 就職への進路志望と学校体験 教心第32回総会論文集, 259.
- 西山 啓・今西一実・藤川美枝子 1990a 「生徒指導」についての教師の意識・態度に関する研究(1) 教心第32回総会論文集, 292.
- 西山 啓・今西一実・藤川美枝子 1990b 「生徒指導」についての教師の意識・態度に関する研究(2) 教心第32回総会論文集, 293.
- 小田久洋 1990 性に関連する否定的場面の調査: 性差について 教心第32回総会論文集, 320.
- 小川一夫(編著) 1979 学級経営の心理学 北大路書房
- 大庭茂美 1990 教師適性検査の基礎的研究(1): テスト・バッテリーを中心として 教心第32回総会論文集, 310.
- 長田雅喜 1986 社会的行動に関する教育心理学的研究の動向と今後の課題: 社会部門 教育心理学年報, 25, 88-97.
- 佐伯 胖 1987 教育心理学をおもしろくするには: 展望 教育心理学年報, 26, 161-171.
- 斎藤幸一郎 1976 人間心理学序説: 意識の科学への新しい道 共同出版
- 佐藤昭雄・松元泰儀 1990 児童・生徒の認知する教師への信頼に関する研究(1) 教心第32回総会論文集, 307.
- 柴田利男・野辺地正之 1990 青年期の身体に対する男らしさ・女らしさの認知 教心第32回総会論文集, 173.
- 嶋野重行・勝倉孝治 1990 小学校教師の指導的態度と「問題行動」認知の関連(2) 教心第32回総会論文集, 311.
- 白樫三四郎 1988 社会部門 教育心理学年報, 27, 74-84.
- 曾我祥子・吉田恒子 1990 大学生活に対する青年の意識と行動V 教心第32回総会論文集, 232.
- 園田直子・青木多寿子 1990 大学生におけるジェンダー・シェマの性差について(III): 領域特性からみた性差 教心第32回総会論文集, 317.
- 末田啓二 1990 青年期における性役割特性に対する社会的評価 教心第32回総会論文集, 316.
- 杉村 健・伊谷 実 1990 中学校における校則の研究(2) 教心第32回総会論文集, 331.
- 高橋丈司 1990 木造校舎と鉄筋校舎に対する子どもの認知の比較 教心第32回総会論文集, 299.
- 竹下由紀子 1987 社会部門 教育心理学年報, 26,

87-96.

- 竹下由紀子 1990 教員研修用教材作成のための基礎的研究 教心第32回総会論文集, 313.
- 竹内史宗・三宮真智子・遠藤由美 1990 小学生の教師に対する好悪感情と叱りことば認知 教心第32回総会論文集, 306.
- 田村正紀 1981 流通産業生き残りの条件-18-: カギ握る解釈システム・信号情報から価値創造 日経流通新聞10月1日, 13.
- 多良幸男・内藤勇次 1990 集団にとけこめない児童の特性について: 周辺児・孤立児を中心として 教心第32回総会論文集, 328.
- 外島 裕・山崎晴美・田中堅一郎・大村政男 1990 大学通信教育在学生の心理要因に関する研究(II): 受講意識について 教心第32回総会論文集, 302.
- 富田庸子 1990 児童による教師態度認知の変容に関する追跡的研究 教心第32回総会論文集, 304.
- 内山絢子 1990 性非行少女の非行内容別社会的背景と行動特性 教心第32回総会論文集, 319.

- 若松養亮 1990 高校・短大生の職業適性観について: 先天性および固定性の判断に着目して 教心第32回総会論文集, 289.
- 渡辺三枝子・堀田千秋 1990 職業目標の有無と教育に対する評価: 「青年の職業適応に関する国際比較調査」の分析(その2) 教心第32回総会論文集, 287.
- 山崎 篤 1990 志望校変更に及ぼす一要因の影響に関する研究 教心第32回総会論文集, 257.
- 山崎晴美・外島 裕・田中堅一郎・大村政男 1990 大学通信教育在学生の心理的要因に関する研究(I): 実態調査について 教心第32回総会論文集, 301.
- 吉田明弘 1990 グループ編成における友人関係の変化について(IV) 教心第32回総会論文集, 218.
- 吉田勝也・丸山総一郎・森本兼囊 1990 中学生の生きがい: 自己実現, 生活様態, 抑うつ視点から 教心第32回総会論文集, 281.
- 古澤雅子 1990 高校生の生活意識の実状: 進学校・非進学校の比較研究 教心第32回総会論文集, 141.